公同書簡　三

ペトロの手紙二　連続講解説教

始・二〇〇八年　八月　三日

至・二〇〇八年一二月一六日

辻　幸宏

本説教集は、二〇〇八年に大垣伝道所において説教を行い、説教要約としてまとめたものです。元来、このように説教集としてまとめる意思などはまったくなかったのですが、語った言葉に責任を持つことを考えた時、以前に語った言葉を隠しておくのではなく、公表し、読んでいただくことが必要かと思い、大宮教会小会の了承を得て、印刷する決断しました。

ペトロの手紙二は、公同書簡の三番目に位置しています。今後順次、公同書簡の中から説教集を印刷していく予定にしています。

個人において聖書を読む時、本説教集を共に読んでいただければ幸いです。

なお、説教には日付けを入れておきました。時事問題等は現在とは異なった状況にあるものもあるからです。

既刊　公同書簡一　ヤコブの手紙

二　ペトロの手紙一

二〇二〇年一〇月

辻　幸宏

「私たちの神」ペトロの手紙二　一章一～二節　　二〇〇八年八月三日

Ⅰ．手紙の差出人

どの書簡でも同じですが、差出人が記されていなければ、その手紙は信用されません。私たちもこの手紙を読み始めるにあたり、改めて誰が誰に対して語る手紙であるかを確認しなければなりません。最初に差出人は、「イエス・キリストの僕であり、使徒であるシメオン・ペトロ」と記します。シモン・ペトロのことです。「シメオン」とはヘブライ語名で、「シモン」はギリシャ語読みです。このことは、読者の中にユダヤ人キリスト者もいたことを意識していると考えられます。

シメオン・ペトロは「イエス・キリストの僕」・「使徒」です。「僕」は「奴隷」のことです。「奴隷」には、権利も自由も認められず、主人の支配の下に、完全服従が求められます。つまり、ペトロはイエス・キリストの言葉に全面的にひれ伏し、服従していることを告白しています。また、通常は自ら進んで奴隷となることはなく、ペトロが自らの口で告白することは、「イエス・キリストの奴隷」、「主の僕」となることが、ただ隷属的に服従が求められたのではなく、同時にそれに伴って与えられる恵みをはっきりと見据えているからです。つまり、イエス・キリストの奴隷となることは、同時に「罪の奴隷」、罪の刑罰としての「死の奴隷」から解放させられていることを物語っています。

私たちは十戒を朗読しますが、十戒の序言では、旧約のイスラエルが実際の奴隷の状態から救い出されたように、キリストに結ばれたキリスト者は、罪の奴隷から救い出されたことを確認します（参照・出エジプト二〇章二節）。しかしキリストに捕らえられなければ、この「罪の奴隷の状態」にあることが認識できず、人々はイエス・キリストの僕になることを自ら願うことはありません。

またペトロは自らのことを「使徒」と告白します。本来は「遣わされた者・使者」を表す言葉です。特別にキリストによって遣わされた一二人が、使徒とされています。

このように、イエス・キリストの僕であり、使徒であるシメオン・ペトロが手紙を書き送ると語ることにより、この手紙を受け取った読者にとっては、主によって捕らえられ、主に全面的に仕えるペトロが、主から御言葉を受け取り、語り始めることを確認することができます。つまりこのようにペトロが手紙を書き始めることが、これこそが神の言葉であるとの証言です。

Ⅱ．手紙の受け取り手

では、手紙は誰に対して記されたのでしょうか？　第一の手紙では手紙の受け取り手を限定していました（一章一節）が、第二の手紙では、受け取り手を限定するような言葉はありません。ただペトロは「愛する人たち、わたしはあなたがたに二度目の手紙を書いています」（三章一節）と語り、第一の手紙の存在を前提にしています。つまり、第二の手紙で受け取り手を限定しないことは、第一の手紙を書き送った教会のみならず、別の教会にも語り継がれ、多くの教会の人々にすでに読まれていていたことを前提にしています。

しかしペトロが第二の手紙の受け取り手を記すことにより、私たちはキリスト者とはどのようなものであるのか、知ることができます。①三位一体なる神。日本語では「義」が何を受けているのか分かりませんが、「わたしたちの神」と「救い主イエス・キリスト」が単数名詞「義」にかかっています。「義」はいくつもあるのではなく一つです。つまり「わたしたちの神（父なる神）」＝「救い主イエス・キリスト」であり、「父なる神」と「御子イエス・キリスト」が一人の神、つまり父・子・御霊なる三位一体なる神の存在をここで表し、この三位一体なる神の存在そのものが「義」です。②神の義。「わたしたちの神の義」と語る時、無限・永遠・不変の霊である神が、存在において完全なる義なる方です。③御子の義。一方「救い主イエス・キリストの義」と語る時、マリヤの胎より人としてお生まれになって以来、地上の生涯において、律法をまっとうし、義を貫かれたことを語っています。

つまり私たちの救いとは、神ご自身の義によるのであり、私たち自身には「義」なるも

のは何もなく、私たちの罪の償いをキリストの十字架に委ね、私たちが果たし得なかった律法による義のまっとうをキリストに委ねていることを語っています。だからこそ、私たちキリスト者が救われ、罪が赦され、義と認められ、神の子とされたのは、一方的に神の御業であると語ることができます。

Ⅲ．神を知ること

そしてペトロは、キリスト者とされた私たちが、さらに神の子として相応しくなるために必要なことを二節で付け加えます。「神とわたしたちの主イエスを知ることによって、恵みと平和が、あなたがたにますます豊かに与えられるように」。義と認められ、神の子とされ、信仰が与えられることは、神からの一方的な御業ですが、ペトロのように真にイエス・キリストの僕となり、そのように名乗ることができるためには、主なる神と、救い主イエス・キリストがどのようなお方であるかを知らなければなりません。

パウロは伝道旅行においてアテネに行った時（使徒一七章）、アテネの人々が、『知られざる神に』と刻まれている祭壇に拝んでいることを指摘します。キリスト教信仰とは、訳の分からないまま、盲目的に信じるものではありません（使徒一七章二三～三一節）。主がお語りくださる御言葉に聞き、主なる神と救い主イエス・キリストがどのようなお方であるかの認識をしっかりと持たなければ、何が罪であり、何が救いであり、救いの結果何が与えられるのか分かりません。だからこそキリスト者として信仰に生きる以上、私たちは御言葉に聞き、神がどのようなお方であるかを知る必要があります。キリストの十字架による罪の贖いと、救いが示されているからこそ、わたしたちは、恵みと平安を得ることができます。そして御言葉に聞き従う生活を送ることにより、罪の奴隷から解放され、救い主イエス・キリストの僕であることに喜びを得ることができます。

「すばらしい約束」ペトロの手紙二　一章三～四節　二〇〇八年八月一〇日

Ⅰ．伝道

未信者はもちろんのこと、キリスト者ですら、真に生きて働かれる主なる神と出会っていないことがあります。それは主なる神の御力が私たち自身に働きかけていることを受け入れることができていないからです。これは教会にとって大きな問題です。つまり闇雲に「神がいるから信じなさい」と語っても、神と真に出会っていない人たちが神を信じて礼拝するようにはなりません。そこに生きて働く主なる神の存在が人々に示されなければなりません。その上で、キリスト者に与えられる祝福が、どれほど素晴らしいものであるかを、伝えていく必要があります。

Ⅱ．主の存在を知れ！

カルヴァンは、キリスト教綱要で、「聖書はいたるところで、昔の聖徒らが神の現臨を実感した時はいつも衝撃を受け、また打ち砕かれたと宣べている。……というのも我々は神が不在であると見た時、安全にかつ確乎として立っていたのであるが、神の栄光が顕されるや否や、死の恐怖に打ちのめされるまでに揺すぶられ、おびえきり、いや実にそれに飲み干されてほとんど無になってしまうからである。そこから結論されることは、人は自己を神の尊厳と対置してみない限り、自らのいやしさについて自覚にさほど感銘させられたり動揺させられたりはしない」と語ります。つまり、私たち自身がまず生きて働く主なる神の御前に立ち、主の存在を受け入れざるを得ない状況に置かれることが必要です（参照・三節）。

ヨナは、主によって召され、アッシリアのニネベに行き、悔い改めて主に立ち返るように語ることが求められました。しかし彼は、異邦人が罪を悔い改め救われることを嫌い、まったく方向違いのタルシシュ行きの船に乗り、主から逃れようとします。しかし主は嵐を起こし、彼の乗った船を難破させ、彼にはその嵐が主の御業であることが示されます。

彼は主なる神を信じながらも、主に出会う前は、主に言い逃れを行っていました。しかし主の御力が示されると、服従せざるを得なくなりました。

ペトロも同様です。主イエスの弟子ペトロは、主イエスの宣教に三年間、付き添ってきましたが、彼は真の主には出会っていませんでした。だからこそ主イエスが逮捕された後、主に委ねることなく、自らの力で問題を解決しようとして、主イエスを三度否定することとなります。しかし復活の主イエスはペトロと出会い、彼の罪を赦し、受け入れ、宣教へと押し出して下さいました（ヨハネ二一章一五～一九節）。

主ご自身がその姿を示し、預言者・使徒として立てられた者たちは、自らの弱さ、いやしさ、小ささなどが示されつつ、主の御前に遜り、主がお与えくださる御言葉、それは罪の悔い改めを迫り、主を信じること求め、大胆に人々に語る者へと変えられていきます。

Ⅲ．主が私たちに示されること

つまり人が変えられ、主なる神を求め信じるようになるためには、主からの働きが必要です。聖書には二つのことが記されています。

第一に、主ご自身の栄光と力がはっきりと示されることです。主は、天地万物を六日の内に作られた方、私たち人間の命を司られている方、私たちのすべて（行い、言葉、心）を知っておられ、私たちの行いの故に裁きをなさる方です。主の栄光に比べれば、私たちは無に等しい存在です。私たちは今、命が与えられ、生活に必要なものが備えられ、不自由なく暮らすことができるのも、主の恵みです。しかし多くの人たちは、この主の御力が示されれず、この恵みが祝福であることが理解できません。だからこそ、主への礼拝、主への畏れがないがしろにされています。しかし、主の御前に立たされた時、私たちは、自らの思いのままに生きる生活は改められていきます。

第二には、主なる神が、その力において、つまり罪の赦しと救い、永遠の生命を、わたしたちにお与え下さったことが示されます（三節）。これ程のすばらしい約束はありません。私たちは、自らの罪の故に裁かれることなく、かえって主の救いに入れられ、神の子

とされます。そのために、主は独り子イエス・キリストをこの世に賜り、私たちが果たし得なかった律法をキリストが果たし、私たちが背負わなければならなかった罪の刑罰としての十字架をキリストは担って下さいました。

Ⅳ．御言葉に生きる

しかし、私たちは現実の問題として、旧約の預言者やペトロのように、主なる神の御声を直接聞き、主イエスに出会うことはできません。しかし主は、私たちに御言葉である聖書をお与え下さり、主は聖書を通して、聖霊の働きにより、主の御力と救いを私たちにお示し下さいます（二節）。

申命記六章の御言葉は、出エジプトを果たし、約束の地に向かおうとするイスラエルの民に与えられた主の御言葉です。主は奇跡をとおしてご自身の存在、知恵、力をイスラエルにお示しになり、約束の地を約束してくださいます。そして主は、私たちが主の道を歩むために十戒をお与え下さいました（申命記五章）。そして主は、約束の御言葉を子供たちに繰り返して教えるように語られます。つまり主に出会った者の信仰が、生き生きと次の世代に語り継がれる時、その信仰は、語られた御言葉によって伝えられていきます。語り継がれる御言葉に、リアルさが欠けた時、生きて働く主なる神が概念化し、信仰も概念的、頭だけの信仰になります。これは現在日本の伝道の問題ですが、旧約のイスラエルの時代においても同様の問題があったのです。

私たちの救い主である主なる神は、概念的なお方ではありません。イスラエルに主の御力を示されたように、私たちに対しても主の御業をお示し下さいます。私たちは祈りが聞き届けられることにより、このことを確認することができます。さらに、私たちを死から救い出してくださることをお示し下さり、約束して下さいます。

このことが理解できる時、初めて「この栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束を与えられています」（四節）との言葉を受け入れることができます。この信仰は、私たちが御言葉を聞き続け、知識として身に着けることにより、信仰が確かな

ものとされていきます。主なる神の筋の通ったすばらしい救いの御業が示された時、世における情欲に染まった退廃の中に置かれている自分の姿が、初めて見えてきます。

今日は聖餐式が用意されていませんが、聖餐式において食するパンと杯のワインにおいて、私たちは十字架の上で裂かれたキリストの体と流された血を想起します。しかし同時に、主が私たちにお与えくださる神の国における盛大な晩餐の前触れでもあることを忘れてはなりません。ここに集う者は、ごくわずかです。しかし、天国における食卓には、時代を超え、民族を超え、言葉の違いを超えた人々が集められ、主を誉め称え、賛美しつつ、主の晩餐に与ります。今もなお生きて働く主なる神の御業に心から感謝しましょう。

「愛・信仰の実り」ペトロの手紙二　一章五～八節　　二〇〇八年八月三一日

Ⅰ．序

今、教会では信仰の継承が問題とされています。問題は、契約の子どもたちが教会から離れること、教会の世俗化です。つまり、信仰を告白し教会には来ているキリスト者であっても、真のキリスト者としての歩みをしていない人たちがいます。それは、信仰が形式化しており、聖書の知識を持ちつつも、中身が伴わないキリスト者となっているからです。新約の教会も、同様の問題が起こっていました（三～四節）。真のキリスト者に必要なことは、①真の生きて働く主なる神に出会うこと、②主によって与えられる罪の赦しと永遠の生命の喜びに満たされることです。

Ⅱ．信仰によってもたらされるもの

続けてペトロは真の信仰者の姿を八つ挙げます。

①信仰・真の信仰者とは、主による救いに予定され、聖霊により召され、与えられた御言葉により救いが示されて、信仰を告白する者へと押し出されます。すると、キリストの

十字架により罪が赦され・永遠の生命が与えられた者として、地上での生活でも、罪と対峙し、主の御言葉に聞き従う者として、生活に変化をもたらします。しかし信仰者でも、罪の中に生きていた時と変化なく生活している人は、真の救い主と出会っていないか、もしくは救い主によって与えられた祝福の喜びに生きていません。

②徳・神の栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束が与えられています（四節）。つまりキリスト者はキリストに倣った生活を行う者へと押し出されます。これは権力・武力・財力といった世の罪の生活との決裂であり、キリストの主権の下に神の僕として生きることです。

③知識・知識とは、神の御言葉を蓄えることと同時に、御言葉に従って生きることです。知識を蓄えながら、生活が伴わないのは真のキリスト者ではありません。

④自制（節制）・人は知識を持てば、権力・地位・誉れを求めます。しかし主の僕とされたキリスト者は、自らの内に備えられたものが、すべて主から与えられた賜物として、感謝し、主の働きのために用います。従って、知識を誇ることはなく、謙虚に人に仕えます。

⑤忍耐・私たちには、キリストによる忍耐の模範が示されています。キリストが十字架の苦しみにより、サタン・罪・死に対する勝利が与えられました。それは同時に滅び行くこの世に留まる者としてではなく、永遠の生命が与えられた者としての勝利でした。だからこそ、私たちも滅び行くこの世に縛られることなく、この世にあっては忍耐が強いられることとなっても、主によって与えられる神の御国を見据えた歩みを行います。

⑥信心（敬虔・信仰深さ）・これは主イエスによって永遠の生命と共に与えられています（三節）。そして同時に、すでに救いにあるキリスト者として、日々御言葉と聖霊の養いにより、心がけていかなければなりません。

⑦兄弟愛・愛・「兄弟愛」はフィラデルフィア、神の民相互の愛です。「愛」はアガペーです。キリストの十字架こそが、すべての罪の赦しに与る神の民に対する愛の表れです。

キリスト者とされた私たちも、愛されている者として、神を愛すると同時に、兄弟姉妹に対する愛、そしてすべての隣人に対する愛を持つ者へと、変えられていきます。

Ⅲ．愛の実践

先週、信州夏期宣教講座に出席しました。「戦争と教会～教会は何をするか～」で平和論であり、「義戦論・聖戦論」が成り立つか、「合法的戦争」はあり得るかが問われました。この講座は、キリスト教の歴史を検証しつつ、私たちに求められている信仰を問います。

三一三年に正式にキリスト教がローマの国教となるまで、皇帝を神とするローマの兵士になることが偶像であるとして、キリスト者は兵士になることはなく、結果として戦争を行うことはありませんでした。しかし、皇帝がキリスト者となり、キリスト教が国教となってからは、その障壁もなくなり、キリスト者もローマの兵士として、戦争に出向くようになります。この時以降「義戦論」・「合法的戦争」が語られるようになります。

ウェストミンスター信仰告白も「合法的戦争」は認められる立場にあり、改革派教会もこの立場の上に立っています。しかし、戦争は非常に限定されなければなりません。ボンヘッファーは、ヒットラー政権下のドイツにあって、最終的にヒットラーに捕らえられ、処刑されますが、彼はヒットラーのユダヤ人政策のため、最後まで悩み、ヒットラー暗殺を企てます。このことが主の御前に合法的か、非常に悩む事柄です。

これらの背景にあるのは、「あなたの隣人とは誰か」、そして「あなたは隣人を愛しているか」と言う問です。真のキリスト者として、主による信仰が与えられる者は、兄弟愛、民族愛に留まることなく、敵をも愛し、和解を求めます（参照・Ⅰコリント一三章一～七節）。

「真のキリスト者」ペトロの手紙二　一章八～九節　　二〇〇八年九月七日

Ⅰ．信仰＝主イエス・キリストを知ること

ペトロは、三節から真のキリスト者とはどうあるべきかを語ってきています。その前提は、①生きて働く救い主に出会うこと、②神による罪からの贖いと永遠の生命という、救いのリアリティを持つことでした。そして真の信仰が与えられることにより、それに続く徳・知識・自制・忍耐・信心・兄弟愛・愛が加えられていきます（五～七節）。

ここで、私たちが確認しておかなければならないことは、信仰義認との関係です。よく、「キリストのみ（恵みのみ）、信仰のみ」が語られます（参照・ガラテヤ二章一六節）。信仰義認は、宗教改革の旗印の一つであり、プロテスタント福音主義教会にとっては要です。

しかしペトロは、良き業、信仰の実りが必要であると語ります。ここに違いがあるのでしょうか？

「わたしたちの主イエス・キリストを知るようになるでしょう」（八節）。新共同訳では、信仰の結果、主イエス・キリストを知るように記されていますが、口語訳・新改訳ではニュアンスが異なります。「わたしたちの主イエス・キリストを知る知識について、あなたがたは、怠る者、実を結ばない者となることはないであろう」（口語訳）。イエス・キリストを知ることは、信仰の結果ではなく、信仰上、必要なことです。「信じれば救われる」と語る時、「イエス・キリスト（の十字架）を信じれば救われる」のであり、他の神ではありません。つまり、信仰を語る上で、イエス・キリストを知ることは、徹底的に重要なことです。キリストと出会い、キリストを知ることがなければ、真の信仰者にはなり得ません。

ではキリストとの出会いとは何か？　キリストが歩まれた道を受け入れることです。しかしキリストについて頭で知識を蓄える事ではありません。キリストがなぜ、その道を歩まれたのか、あなたにとってキリストの歩まれた道とは何かが問われています。

なぜ、神の御子である方が、人として遜られる必要があったのか？
なぜ、キリストは無罪でありながら、苦しみつつ十字架にお架かりになったのか？
なぜ、主イエス・キリストが、十字架の死を遂げられる必要があったのか？
――すべて、あなたの救いのためです。

あなた自身の背負っているもの、それは罪であり、罪を背負ったままでは救いはありません。キリストはそのあなたの罪を担って下さいました。そのため、あなたは自分自身の十字架を背負う必要はなくなりました。キリストが死を遂げられることにより、あなたの罪は贖われました。

そして、キリストが死から三日目に復活して下さったように、キリストに連なるあなたが肉体の死を遂げても、復活する希望が与えられています。キリストが再臨した時、復活し、新しい体が与えられ、神の国における神の祝福に満ちた永遠の生命が与えられます。

キリストを知ることは、あなた自身が背負っている罪の死から解放させられ、喜びに満たされつつ、永遠の生命に生きることです。だからこそ、あなたは希望に満たされて生きる者とされています。キリストの希望に生きる時、人は己が道を歩んでいた者が、キリストの僕として、キリストに倣って歩む者へと変えられていきます。つまり、「信じれば救われる」わけですが、救い主イエス・キリストを知れば知るほど、生活も変化を遂げていきます。それが、「信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加える者となる」ことです。

Ⅱ．信仰の実りをもたらさない者

従って、信仰を告白しながら、以前との生活が全く変化を遂げない者に対して、ペトロは「これらを備えていない者は、視力を失っています」（九節）と語ります。近くのものしか見えず、以前の罪が清められたことを忘れています。これは最初から、イエス・キリストによって与えられる祝福が見えない盲人と同じです。すでにキリストによって与えられている祝福が示されています。だからこそ、信仰を告白したのです。しかしながら、なお生活に変化を遂げないのは、イエス・キリストの御業に焦点があっていないからです。主イエス・キリストによって与えられた救いのすばらしさがどれほどのものであるか理解できず、己自身の罪の大きさを知りません。

この時、主イエス・キリストの見方、つまり聖書の読み方を変えなければ、本当の意味で、キリストを知ることはできません。物語、出来事として聖書を読むのではなく、聖書が自分に対して何を語りかけているかを考えながら読むことが必要です。

「永遠の御国に入る者」ペトロの手紙二　一章一〇～一一節　　二〇〇八年九月一四日

Ⅰ．救いの確信に関して

救い主イエス・キリストによる救いを信じる者は、罪の赦しが与えられ、永遠の御国に入ることができることを信じています。しかし、私たちの信仰は、完全で揺るぎないものであるかと言えば、決してそうではありません。日々の生活の中、様々な誘惑に遭い、信仰が揺さぶられます。時として、神の御国の救いが見えなくなり、教会から遠ざかることさえあります。そのため、この世の生活にどっぷりと浸かり、「神の救いにあるキリスト者である」と口では語りつつも、罪人と同じ生活をしている人もいます。

こうした、私たちの信仰が弱まったりすることに関して、ウェストミンスター信仰告白は第一八章四節において、四つの原因を挙げています。①確信の維持に努めようとしないこと、②良心を傷つけ、御霊を悲しませる罪に陥ること、③突然の激しい誘惑にあうこと、④神が御顔の光を覆ってしまわれ、神を畏れる者たちさえも暗闇の中を歩ませることです。

しかし信仰告白は、続けて「しかし彼らは、神の種と信仰の命、キリストと兄弟たちへの愛、心の誠実さと義務感、を完全に欠いてしまうことは決してなく、かえって、これら

のものが基となって、この救いの確信は、御霊の働きにより、しかるべき時に回復されることができ、また、これらのものによって彼らは、それまでの間も、完全な絶望に陥らないように守られる」と語り、真の信仰者たちは救いの確信はなくならないとの約束が与えられています。この信仰告白の根拠は「召されていること」、「選ばれていること」です（一〇節）。

Ⅱ．神による選びと召し

神の選びは、神の永遠の御計画です。エフェソ一章四節では、私たちキリスト者の選びは、天地創造の前に定められていたことを、はっきりと主は宣言してくださいます。私たちには計り知れない神の選びの御計画が、主が良しとしてくださる時に、聖霊を通して、私たちに働きかけ、神の御言葉によって、信仰へと召し出してくださいます。つまり、内的に聖霊なる神が私たちに働きかけてくださると同時に、外的に、神の御言葉が私たちに知的な理解を与えることにより、私たちは神を知り、キリストの十字架による救いを理解し、信仰を告白する者へと、押し出されていきます。

つまり、「私たちの信仰」は、私たちの側では、時には熱心になったり、罪の故に弱まったりしますが、主体は主なる神にあります。神の永遠の選びにあり、時至って召され者は必ず永遠の御国に入れられます。そのため、一時的に私たちの信仰が弱まったとしても、決して信仰が失われることはなく、内的に働く聖霊と、外的に与えられている御言葉の理解により、信仰が深められていきます。

Ⅲ．救いを確かなものとすること

しかしペトロは「いっそう努めなさい」と語ります（一〇節）。つまり私たちの側にある信仰の確信を、揺るぎないものとするために、いっそう努めなさいとペトロは語ります。それが、信仰の実りとなります。

創世記一二章には、信仰の父アブラハムに与えられた主からの召命の言葉があります。しかし主の約束にも関わらず、アブラハムには、後を接ぐ子どもがいませんでした。その

ため、彼は悩みます。彼の忠実な僕ダマスコのエリエゼルが家を継ぐのか思います（同一五章二節）。その時主は「あなたから生まれる者が跡を継ぐ」とお語り下さいます（一五章四節）。次に、妻サラの女奴隷ハガルによってイシュマエルが与えられた時にも、彼はこの子こそ、跡継ぎであるとも思います（一六章）。しかしこの時にも神は「いや、あなたの妻サラがあなたとの間に男の子を産む」とお語り下さいます（一七章一九節）。そして九〇歳になろうとしていた妻サラに、息子が与えられることが主から告げられた時、彼（一七章一七節）も、サラも笑います（一八章一二節）。彼は、主の召しがありながら、主の約束の言葉に悩みます。しかし主は彼を御霊により働きかけ、直接語りかける言葉により、彼の信仰を強めて下さいました。そのため主が新たなる試練として、イサクを献げるように命じられた時、アブラハムは主の相反する二つの約束が示されたにも関わらず、主を信じて、主の言葉に従います。

つまり、常に聖霊の働きと御言葉の養いによって支えられ、信仰の確信が与えられ続けることによって、主のお命じになる御言葉に聞き従い、良き業を行う者へと押し出されていきます。主はすでに、ここに集う一人ひとりに選びの御計画をもたらされ、召しをお与え下さいました。この主の救いは揺るぐことはありません。だからこそ私たちは、この後聖餐式に与ることにより、救いの確信を強めることができます。

主は聖霊の働きと共に、御言葉によって、私たちを養い続けて下さいます。それを私たちは主の日毎の礼拝における御言葉の説教と、日々の家庭礼拝において与ります。だからこそ、神の選びと召しにある者として、安心しつつ、日々主から与えられる御言葉に聞き、御言葉の養いと祈りによる主との交わりにあり続けていきましょう。

Ⅰ．この世は「仮の宿」である！

今日の説教題を「仮の宿・地上の生活」といたしました。多くの方が「エッ」と声を上げられるのではないでしょうか。誰もが今の生活が何よりも一番大切であり、「仮の宿」とは思っていないからです。

しかし、キリスト者であることをもう一度確認していただくことにおいて、この意味を理解していただけるのではないかと思います。クリスチャンになるとは、キリストの十字架により、私たちの罪が贖われ、私たちの罪が赦されたと同時に、神との和解が与えられ神の国における永遠の生命が与えられたことを意味しています。そうであれば、神の子とされ、神の国における永遠の生命こそが、神によって創造され、神によって救いに与った私たちキリスト者の本来あるべき姿であることを理解していただけるかと思います。

Ⅱ．幕屋と本殿

ところで新共同訳聖書において「仮の宿」と訳されている言葉ですが、実は異訳されており、本来の訳は「幕屋」です（口語訳・新改訳）。つまり、今の生活と神の国の関係は、旧約と新約の関係において確認することができます。

さてここで幕屋に関して、確認しておきたいと思います。主は、イスラエルを選びの民として下さいました。そしてエジプトにおいて奴隷として苦しんでいたイスラエルの民に、指導者モーセを立て、救い出して下さいました。エジプトから脱出した時、主はモーセをホレブの山に登らせ、そこにおいて十戒をお与え下さいました。しかしモーセがホレブの山にいる間に、イスラエルの民は主なる神を忘れ、金の子牛の像を造り偶像崇拝を行います。直接神を見ることのできなかった民の弱さの表れです。この時に、主はモーセに対して、幕屋建設を命令され、幕屋において神礼拝を献げるように命令されました。そして、モーセが幕屋に入るとき、民は全員起立し、自分の天幕の入り口に立って、モーセが幕屋に入ってしまうまで見送ります（出エジプト三三章八節）。イスラエルの民は、自分たちが造った偶像には神はおらず、主なる神が造るように命じられた幕屋にこそ、主が臨在さ

れ、エジプト軍からイスラエルを救い出して下さったように、約束の地にまで導いてくださることを確信したのです。つまり、イスラエルの民は、直接神と出会うことはできませんが、幕屋を介して神と出会い、神を礼拝したのです。

また、イスラエルの民は、繰り返し幕屋の前で生け贄を献げることにより、自らの罪の赦しを主に願い、神による救いを確認します。しかし幕屋はあくまでも仮の宿であり、恒常的に神を礼拝する場ではありません。真のメシアであるキリストが来られる時までのものでした。だからこそ、主イエス・キリストが十字架の上に息を引き取られた時、神殿（幕屋）の垂れ幕は上から下まで真っ二つに裂けました（マタイ二七章五一節、マルコ一五章三八節）。キリストの十字架の御業において、イスラエルの民の救いは成就し、幕屋の働きが終了します（参照・ヘブライ九章一一～一五節）。つまりキリストの十字架により、永遠の罪の贖いが完成し、神の民であるキリスト者は、もう繰り返し生け贄を献げる必要がなくなりました。

そして、契約の箱が安置されている至聖所の前でなければ神礼拝を献げることができなかったものが、聖霊によって集められた神の民は、場所を定めることなく、教会を形成して、神礼拝を献げることができるようになりました。つまり、旧約の幕屋における礼拝は、救い主であるメシアを待ち望んでいたのであり、ぼんやりとした状態にあり、新約が光に照らされていることからすれば、「影」、仮の宿にすぎませんでした。

Ⅲ．肉の死から永遠の生命へ

救い、罪の赦しは、キリストの十字架を境に、旧約と新約の時代を区別することができますが、しかし現実には神の国はまだ完成していません。まだ地上にあっては罪が残されています。だからこそ、罪赦されたキリスト者は、すでに神の国における救いが成就し、約束されているにも関わらず、今なお、罪赦された罪人であり、罪の中におり、今なお罪を犯しています。そして地上の生命には限りがあり、肉の死を避けて通ることができません。

しかし肉の死、地上の生涯を終えることは「仮の宿」から離れる時であるとペトロは語ります。つまり本当の宿があり、神の子として、罪の赦しが与えられたキリスト者には、神の国、天国における永遠の生命という本当の宿が待っています（参照・Ⅱコリント五章一節）。神の国にこそ、本当の祝福があり、罪もなく神を祝福し礼拝する歩みが続き、病気も苦しみもありません。だからこそ、神を信じるキリスト者には希望があります。

Ⅳ．仮の宿と善き業との関係について

最後に一つのことを確認しておかなければなりません。それは、現在の生が「仮の宿」に過ぎず、本当の宿である神の国を求めて生きる時、今の生活が疎かであっても良いのでしょうか？　一掃のこと地上の生涯を縮めてまで、神の国を求めた方が良いのでしょうか？　決してそのようなことはありません。素晴らしい約束があるからこそ、地上の生涯も、神によって救われた者として、感謝と喜びをもって、神の聖・義・真実に倣う者として生きることが求められています（参照・Ⅱコリント五章二～一〇節）。

「キリストの威光の目撃者」ペトロの手紙二　一章一六～一八節

二〇〇八年九月二八日

序．

キリスト者は、まだ救いに与っていない人たちに対して伝道することが求められています。しかし多くのキリスト者は、キリスト者の少ない日本において、どのように伝道すればよいのか、日々格闘しています。今日与えられたペトロの言葉には、私たちがキリスト者として伝道していくために大切なことが語られています。

Ⅰ．伝道

伝道の妨げとなることは多々ありますが、その一つに異端や新興宗教があります。エホ

バの証人、統一協会、オウム真理教などにより、多くの人々がだまされ、被害を被ってきました。そして、宗教の恐ろしさが人々の心の中に植え付けられています。そしてキリスト教も再臨思想があり、「信じなさい。そうすれば救われる」と語る時、異端・新興宗教と一緒にされ、敬遠される理由の一つに挙げることができるかと思います。

異端・新興宗教では、マインド・コントロールによって、人々の思考を停止させ、語られる言葉を無批判に信じさせることが問題とされています。振込詐欺にもみられる手口です。しかしペトロは「わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。」（一六節）と語ります。「伝道」はキリストを証しすることですが、それは人を巧みな話術で思いこませることではなく、真実を語ることです。日々の生活の中で、すべての知識を総合的に考えた上で、真理に導く必要があります。非常に遠回りかも知れません。しかし信仰は、日常から離れて存在するものではありません。教会では神を信じたけれども、家に帰ってきたら忘れていたでは困ります。そのため伝道するには、真実を語り、信頼関係を築くことが大切です。人に信頼していただくためには時間をかけなければなりませんが、信頼を失うことは一瞬です。一度語られた失言は、取り戻すことはできません。

Ⅱ．キリストの御業の証言者・出来事の真実性

キリストの復活、人の復活は、主の働きがなければ、人は受け入れることができません。信仰は、私たちの頭の中にある概念だけでは理解することはできません。いわゆる超自然現象です。頭の中だけで考えると、「作り話」にしか聞こえません。この言葉を受け入れるためには、信仰の目を持って、つまり主なる神が聖霊を通して働きかけて下さらなければ、理解することはできません。

ここでペトロは、キリストの変貌について語ります（参照・ルカ九章二八～三六節）。聖書は、「いかなる犯罪であれ、およそ人の犯す罪について、一人の証人によって立証されることはない。二人ないし三人の証人の証言によって、そのことは立証されねばならない」（民数記三五章三〇節等）と語り、複数の証言を求めます。キリストの変貌に関して

は、福音書を読むことにより、ペトロは、ヨハネ・ヤコブと共に、主イエスに連れられて山に登っていることを、確認することができます。そのため、キリストの変貌は、私たちには不思議に思われる出来事ですが、偽証ではないことを聖書は語ります。

Ⅲ．イエス・キリストは主なる神である！

ペトロはまず「わたしたちは、キリストの威光の目撃をしたのです」と語ります。変貌したキリストに関する証言です。

主イエス・キリストによって救いが与えられ、神の御国が与えられることを語る時、キリストが何者であるかをはっきりさせなければなりません。キリストは威光を弟子たちにお見せになることにより、神に等しい方、神そのものであることを弟子たちに示されました。キリストが単なる人ではなく、神そのものであるからこそ、人には理解しがたいこと、計り知れない出来事（奇跡・復活）であっても、行うことが可能です。

ペトロはこの時には理解できませんでしたが、主は、主イエスこそが真の神の御子であり、約束のメシアであることが示され、主イエスの十字架と復活に立ち会い、すべてを理解したペトロは、今そのことを証言しています。

そしてペトロは「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」（ルカ九章三一節）ことを思いだし、モーセとエリヤが語っていたことが、キリストの十字架によって成就したことを理解し、キリストこそが、旧約聖書によって預言されてきた約束の救い主であることを信じました。つまり、旧約聖書を知ることにより、キリストの十字架と復活を信じることができれば、それに伴うすべての出来事が、旧約の預言と結びついていることが理解でき、理路整然とします。

そして、キリストこそが旧約の時代から預言されてきたメシアであること、キリストは真の神の御子であること、キリストの十字架・十字架の死からの復活は真実であることを、ペトロはここで、「巧みな作り話ではなく、真実である」として証しします。そして、キリストによって指し示されている本宿としての神の国にこそ、私たち人間の最も祝福され

た状態であることを、ペトロは証しします。

「自分勝手な解釈」　ペトロの手紙二　一章一九～二一節　　二〇〇八年一〇月五日

Ⅰ．預言の言葉

私たちは今、キリスト教の正典であり、唯一の信仰と生活の規範である旧新約聖書を手にしています。そして、救いの中心はキリストの十字架・死と復活にあり、新約聖書（福音書）を中心に聖書を読み、説教が語られます。しかし、私たちは旧約聖書も疎かにすることをいたしません。分厚い聖書（特に旧約）を読み通すだけでも至難の業です。来年から発行されます大会機関誌（リジョイス）の計画では、四年の間に、旧約聖書を一回、新約聖書を二回、読むことになっています。それだけ時間がかかります。

そして、特に旧約聖書は、私たちにとって理解しがたい書物であることは、否定できないでしょう。その理由は、文化の違い、歴史的背景を理解していない事などあるでしょう。しかし私たちは新約の光（特にキリストの十字架の御業）に照らして、旧約聖書を読むことができます。つまり聖書を読む時は、その箇所だけ一点に集中して読んでいては、理解できません。天地創造・人間の罪から始まり、旧約における神による罪の指摘と、イスラエルの救い、救い主の預言、キリスト・イエスの降誕・十字架・死・復活・昇天、終末における救いの完成という大きな救いの流れを思い浮かべつつ、聖書を読む必要があります。

ですから、旧約の時代、イスラエルの民は、約束の救い主が、まだ来られていない段階であり、救いがぼんやりとしか知ることはできませんでした。そうした意味では、旧約のイスラエルの民よりも、私たちの方が、歴史的・文化的な理解を重ねることにより、主がお語り下さった意味をより深く理解することができます。

旧約の時代、イスラエルの民は、幕屋において神礼拝を献げていました。メシアが与え

られるとの約束がありましたが、どのような形でメシアが与えられ、救いが成就するか、彼らははっきりと知ることなく、罪の悔い改めを動物の生け贄により繰り返し行っていました。そうした中次第に、律法が、自らの罪を吟味し、悔い改めと主への服従の指針としてではなく、善悪の基準、裁きの基準となり、他人の罪を裁く道具となっていきました。それが律法主義です。

しかし、イエス・キリストが降誕し、福音宣教を行い、十字架の死と復活を遂げられることにより、人々はキリストによる罪の贖いにより、義と認められ、神の子とされ、聖化されました。そのため、旧約の時代には朧気にしか見えなかった救いが、私たちにははっきりと示されました。

Ⅱ．聖書の解釈

続けてペトロは、聖書の預言は何一つ、自分勝手に解釈すべきではないと語ります（二〇節）。律法学者たちは、聖書の御言葉を、人を裁く道具とし、自己保身を行いました。しかし聖書が何が語っているか、私たちは確認しなければなりません（二一節）。聖書は預言者たちの手によって記されましたが、なおも「聖書は神の言葉である」と語られる根拠となる言葉です。主は、預言者たちを立て、聖霊によって啓示され、聖書が記されていきました。そのため私たちは、聖書が語る御言葉を通して、主が私たちに何を求めておられるかを聞き遂げなければなりません。聖書を自分勝手な思いで読むのではなく、主の御心を確かめつつ読まなければなりません。このことは、良きサマリア人の譬え（ルカ一〇章二五～三七節）や、「金持ちの青年の譬え」（マタイ一九章一六～二二節）で明らかです。

だからこそ私たちは、聖書を自分の都合の良いように解釈してはなりません。むしろ、罪人である私たちをなおも愛していてくださる主なる神が、私たちに何をお与えくださるのかを覚えつつ、御言葉に聞かなければなりません。それは時として、罪を指摘し、生活を改める必要を求め、厳しく戒められます。しかしその言葉の背後にある私たちを愛し、

罪を赦し、神の民としてくださる主なる神を覚えるべきです。

Ⅲ．カトリック教会の誤謬

最後に「自分勝手な解釈をしてはならない」と語る時、自分で聖書を読み、解釈してはならないと考えてしまうことがあります。もちろん、そのために教会は、聖書解釈の基準を信仰告白という形で示し、また説教を語る説教者も信仰基準を基にして説教を語ります。しかし同時に、「一人で聖書を読んではならない」・「聖書を解釈してはならない」とは語りません。カトリック教会では、「聖書解釈権は教会にのみある」と語ります。しかしそうではありません。聖書を神の言葉として、自らの思い・自らの都合の良いように読んではいけません。主は、私たちに罪があるにも関わらず、キリストの十字架の故に罪を赦し、救いをお与え下さいました。主のお与え下さった恵みに、感謝と喜びをもって、信仰規準に従って主の御言葉に聞き従っていくことが求められています。

「うそ偽りを語る者」　ペトロの手紙二　二章一～三節　　二〇〇八年一〇月一二日

Ⅰ．日本の教会

現在、宗教に対して人々はどのように感じているでしょうか。一九九〇年代以降、オウム真理教や統一協会の合同結婚式などのため、宗教が恐ろしいものであるとの思いが人々に広まりました。二一世紀に入ってからは、それ以上に無関心となっているのではないでしょうか。また、皇室（国家神道）や創価学会の影響を忘れてはなりません。

こうした日本にあって、私たちキリスト者は何をすべきでしょうか。教会の礼拝出席者数が人口の一％を超えれば社会的影響力も出てきますが、現状は社会的影響力は低下し続けています。しかし私たちは周囲の状況に関係なく、主なる神が私たちを救いに導き、信仰をお与え下さり、主の御言葉に聞き従うことが求められています。

Ⅱ．偽教師・異端者

社会的影響力の少ない日本の教会ですが、なおもサタンは攻撃してきます。彼らは、教会が小さくとも、真理を求めキリストの御言葉に聞き従う教会の力を恐れています。だからこそ、サタンの攻撃として偽教師が現れます（一節）。しかも偽教師は教会の中から出てきます。彼らは「偽」がついても「教師」と呼ばれ、教会で主なる神に仕えていた人たちです。ある者は教会を乗っ取ることを目的で、自らの考えを隠して教会に潜入し、後に影響力を持ってから異端者として働きます。一方、当初はそうした思いはなく、純粋に牧師としての働きを行っていた者が、後に異端者として働く場合もあります。

こうした異端者たちは、表向きは神のために働いていますが、実はサタンに支配され、聖書が語ることを否定します。キリストを否定し、キリストの十字架を否定します。ここに巧妙なすり替えがあります。ですから、私たちキリスト者は気をつけておかなければなりません。「偽教師」は私たちの教会の中から生じてくるからです。通常、牧師が語る説教は、聖書に従って正しく語られていると考え、無条件に受け入れる方が多いかも知れません。ここにサタンはつけ込むのであり、信徒の方々は牧師の語る事だからと鵜呑みにせず、吟味しなければなりません。特に長老がその任にあたりますが、信徒一人ひとりが信仰の養いの内に備えなければなりません。

Ⅲ．キリスト者の対応

しかし、「自分には誤りを聞き分ける自身がない」と言われる方もいるでしょう。ペトロは、キリスト者一人ひとりが、偽教師を見分ける方法を教えます。

①彼らは滅びをもたらす異端を密かに持ち込み、自分を贖ってくださった主を拒否します（一節）。つまり別のものを神とし、聖書の御言葉を否定します。統一協会であれば文鮮明のように、キリストとは違った仲保者やメシアを信じるように求めます。

②彼らはみだらな行為を楽しみます。数年前、京都の教会で牧師の不品行が問題となりました。また韓国の摂理という教会でも発生しました。こうした問題の多くは、倫理的なこととして片付けがちですが、ここにサタンが入り込んむ危険性があります。

③彼らは欲深く、うそ偽りであなた方を食い物にします。統一協会やオウム真理教、新興宗教に見られる現象です。多くの献金を要求し、人々の生活を食い物にします。

教会は、こうした異端者が現れた時、御言葉に照らして、これらの人々を裁き、教会から除去しなければなりません。そのために教会では、教会会議（小会・中会・大会）が設置されています。そして必要に応じて戒規が執行されます。戒規の目的は、①「キリストの栄誉の擁護」、②「違反者の霊的利益と懲治」つまり違反者がその罪を知り、悔い改め、信仰を新たにするためであり、ただ単に切り捨てるための行為ではありません。それから③「つまづきの除去」、④「教会の純潔および繁栄の増進」です。私たち改革派教会においては、教会会議を行うことにより、一人の偽教師が実権を握り、教会が腐敗・堕落することから守ることができる措置を取っています。だからこそ、私たちは、サタンの使いとして偽教師が、教会に忍び込んでくるとのペトロの言葉に対して、恐れる必要はありません。

このように偽教師を確認するマークが与えられていると同時に、キリスト者は、すでに神の子とされています。キリスト者は、罪赦されて、永遠の生命が与えられています。この後、聖餐式に与りますが、信仰を告白した者は、キリストの十字架を想起しつつ、同時にキリストによって招かれる神の国における晩餐に招かれている喜びに生かされています。さらに私たちは、地上の生涯の歩みの中に主がおられ、多くの困難、信仰的な揺さぶりにおいても、主は私たちが救いの道を歩んでいくことができるように、守り、励まし、力づけて下さいます。だからこそ、私たちは説教に招かれ、御言葉に聞き続けること、日々の家庭で御言葉に聞き続けることにより、心配することなく、希望に満たされ信仰生活を歩み続けることができます。

「正しくない者たち」　ペトロの手紙二　二章四～九節　　二〇〇八年一〇月一九日

序．

キリスト者はキリストの十字架による救いに導かれながらも、日々の生活においても様々な困難があります。その中に迫害や教会を否定するような人々もいます。しかし私たちが忘れてはならないことは、私たちは今「仮の宿」に住んでいるのであり（一章一三節）、「本宅」としての神の国の祝福が約束されています。

Ⅰ．主の裁き・天使

そして今日の御言葉では、最後の審判において主に逆らい続けた者がどのようになるか、旧約聖書の三つの例によって語ります。

第一は天使についてです。「天使」とは、通常「神の子ら」（創世記六章一～七節）と言われています。しかし、私たちは天使の理解が足らないかと思います。そのためウェストミンスター大教理問答において確認したします（問一六、一九）。

問一六　神は、どのようにみ使を創造されたか。

答　神は、すべてのみ使を、死ぬことなく、きよく、知識においてすぐれ、力において強い、霊として、神の命令を実行し、み名を賛美し、しかも変化しうるように、造られた。

問一九　み使に対する神の摂理とは何であるか。

答　神はその摂理によって、ご自身の栄光のために、あるみ使らが自ら好んで、回復できないほどに罪と滅びに陥ることを許し、そのことと彼らのすべての罪を限定し、配置された。また、残りのみ使らを聖潔と幸福とに確立された。そして、み心のままに、彼らすべてを、神の力、あわれみ、正義を行なうのに用いられる。

創世記六章では天使の裁きについて言及がありませんが、ペトロは天使の裁きに言及します（四節）。なおさらのこと、人間は主の裁きから逃れることなどできません。

Ⅱ．主の裁き・すべての人（ノアの洪水）

次にノアの時代の洪水です。主が人を造られたことを後悔するくらい、罪が世に満ちていました。そして洪水によって、ノアとノアの家族総勢八名が保護されただけで、主はすべてを水に飲み込まれます。主の裁きには容赦はありません。

では、聖書の語る神は無情の恐ろしい神でしょうか？　私たちは、主なる神と私たち人間との関係を知らなければなりません。人間が主であり、神が従ではありません。主が天地万物を創造され、私たちは神の被造物です。造られた者が、造って下さったお方に物申す資格はありません。また私たちは、義・聖・真実なる主の御前に立つ時、行い・言葉・心において、主のご命令になられている律法を何一つ満足させる行いはできません。これが罪であり、主の一方的な救いがなければ、私たち人間は主の裁きから逃れることはできません。

しかし今の時代、ノアの洪水のような全面的な主の裁きはありません。それは、当時よりも今の方がまだマシだからではありません。主の約束の故です（創世記九章一一節）。そのため、主は、最後の一人が救われるまで、裁きを猶予して下さっているのに過ぎません。神の愛、神の忍耐を、私たちは忘れてはなりません。

主はノアと家族八人を助けます。彼らも罪人でした。彼らは主の一方的な招きの言葉に耳を傾け、箱船を造りました。このことを主は「義」と認め、善き業として受け入れて下さいました（参照・ウェストミンスター信仰告白一六章）。この世において人々に賞賛される立派な行為が「善き業」ではなく、むしろ、未熟、不完全かも知れませんが、主を信じ、主の御言葉に聞き従う行いこそが、「善き業」です。信仰抜きに行われる立派な行いもありますが、主の御前に受け入れられません。

つまり、すべての民は主の御前に罪人であり、誰一人、主の裁きから逃れることはできませんが、主なる神を信じ、主の御言葉に聞き従うことによって、主に受け入れられ、義

と認められ、主の裁きから逃れることができる者とされるのです。

Ⅲ．主の裁き・全面的に（ソドムとゴモラの裁き）

最後はソドムとゴモラの裁きです（創世記一九章）。この裁きは旧約を代表する裁きとして、新約でも度々取り上げられます（マタイ一〇章一五節、一一章二三～二四節、ルカ一〇章一二節、一七章二九節、ローマ九章二九節、Ⅱペトロ二章六節、ユダ七節、黙示録一一章八節）。この裁きが、黙示録に描かれている終末の世界と重なります。しかしこの裁きは非常に限定的な二つの町だけの裁きでした。第二次世界大戦では全世界に戦禍が広がりましたが、まだ部分的でした。終末においては、全世界の三分の一が焼けます（黙示録八～九章）。そして最後の審判では、全世界の人々が誰一人残らず、主の裁きの座に立たされます。主の義が貫かれるためです。主は罪を見逃すことのできないお方です。そのため、主に逆らう者、主に敵対する者、主の御言葉を無視する者、キリスト者を攻撃・迫害する者は、すべて自らの罪の故に、主の裁きによって滅ぼされます。

しかし主によって主の御前に集められ、主を信じ、主の御言葉に聞き従う者には、イエス・キリストの十字架の御業による罪の赦しと永遠の生命が約束されています。だからこそキリスト者は、地上の生涯にあって、様々な困難、試練、迫害があったとしても、主が共にいて下さり、守り、養い、導いて下さいます。そして、キリストの十字架の御業の故に、私たち自身の罪が贖われ、義と認められ、神の子として、神の国に迎え入れられます。私たちの持つ希望と喜びは、まさに主による救いの御業にこそあります。

「人をそしる者」　ペトロの手紙二　二章一〇～一六節　　二〇〇八年一〇月二六日

序．

前回、主に逆らい続ける者は、主の裁きから逃れることができないことを、旧約聖書の

三つを例にとって考えてきました。天使でさえも主の裁きから逃れられず、いつの時代、どこに住んでいようと、誰一人、主の裁きからは逃れることはできません。つまり、救いに与るためには、主が語られる御言葉に聞き従うこと以外にはありません。そして今日のところでは、神の御言葉に背き続ける者たちの罪が列挙されています。

Ⅰ．正しくない者たちの姿

ペトロがここで思い描いているのは、ソドムの裁き（創世一九章）です。ソドムのロトの家に招かれた二人の御使いに対して、彼らを捕らえるために、若者も年寄りもこぞってロトの家に押しかけてきます。主は二人の御使いを迎え入れもてなしを行ったロトと家族を救われる一方、そうでない者たちは、火で焼き払うという仕方で裁かれます。このソドムの人々の罪についてペトロは、「汚れた情欲の赴くままに肉に従って歩み、権威を侮る」（一〇節）と語ります。「権威＝主権」はすべてを創造し統治しておられる主にあります。被造物であり、主の御前に罪人である私たちにはありません。しかし私たちは、主の権威を見ることができません。主の言葉によって示されなければ理解できません。ルカ一六章に金持ちとラザロの話しがあります。主の権威は、御言葉によって信じなければ、どのような奇跡が起ころうと、地獄からの使者が遣わされようと、信じることはできません。

次に主の裁きを免れない者の罪として、「厚かましさ」「わがまま」（一〇ｂ節）が挙げられています。主の権威を受け入れない者は、他人をも受け入れないがために、厚かましく、わがままとなります。一三節以降では、いくつもの裁きに値する罪が指摘されます。こういう人々を、キリスト者は気をつけなければなりません。しかし同時に、私たち自身がこうした罪を犯していないか、日々自己吟味することも求められています。

Ⅱ．人をそしる者

ペトロはもう一つ罪を取り上げます。「そしり」です（一〇ｂ節、一二節）。彼らがそしる相手は、キリスト者です。「そしり」は、単なる批判に留まらず、「冒涜する、誹謗

する、汚す、中傷する」と言った意味があります。また彼らは「知りもしないこと」でそしります。「無知」は重大な罪です。「分からなくても良い」ではダメです。知らないから、神の力・権威・裁きを無視し、逆に侮り、そしります。いわゆる怖い者知らずです。

こうしたことは、神についてばかりか、私たちの生きる世界においても言えます。人を批判する時、私たちは、外見だけで判断してはなりません。批判は、相手の内実を知った上で、説得力をもった言葉で、誤り、偽りを指摘しなければなりません。

その上で、キリスト者はそしる彼らに対して、批判をしてはなりません。キリスト者は、彼らが真の知識を持たず、キリスト者を批判し、迫害することに対して、さげすんだり、批判する必要はありません。彼らの無知・過ちを指摘し、罪の悔い改めと信仰を求めるために話しかけることはあり得ます。しかし、彼らの悔い改めには主の御霊の働きが必要であり、私たちは主に委ねなければなりません。その上で、彼らが悔い改めなければ、彼らの裁きは、主に委ねるべきです（Ⅰペトロ二章三節）。主の裁きを私たちが行ってはなりません。

ペトロは一五～一六節でボソルの子バラムについて指摘します（参照・民数記二二～二四章）。エジプトを脱出したイスラエルが約束の地カナンに帰還してきた時、そこに住むモアブの王バラクは、イスラエルを恐れます。そのためバラク王は、占い師であるバラムに対してイスラエルを呪わせようとします。そして占い師バラムは、その報酬に心を寄せ、イスラエルを呪うように祈ります。しかしバラムのろばに主の霊が宿り、このろばが人間の声で話し、バラムがイスラエルに対して呪うのではなく、祝福を行わせます。主は、主に逆らう者の心を一八〇度変更させる力を持っておられます。

またパウロは、復活の主イエスに出会う前、ファリサイ人であり、教会を迫害してきましたが、復活の主イエスに出会うことにより、変化し、大宣教者となります。

つまりキリストを侮り、キリスト者をそしる者であっても、主の霊が働くことにより、罪を悔い改め、主に立ち返ります。これは主の御業です。ですから、迫害者であったとし

ても、私たち自身が裁きを行ってはならず、主に委ねなければなりません。

Ⅲ．キリスト者は、力も権能もはるかに勝っている！

最後に、キリスト者は「力も権能もはるかにまさっている」ます（一一節）。私自身の知恵によるのではなく、主の権威により、主の勝利により、そしてキリストの十字架の贖いにより、義と認められ、神の子とされ、そして聖化の歩みを行っています。そして、キリストの再臨の時、完全なる勝利が与えられ、神の御国に凱旋します。

これがどれほどの喜びでしょうか。すべてを治めておられるお方による勝利が与えられています。だからこそ、今、彼らが権威を握り、彼らが主を侮り、キリスト者をそしったとしても、私たちが主に代わって裁くことは必要なく、また批判する必要もありません。日々の生活の中で苦しみや悲しみが続くとしても、それを遙かに超える喜びが約束されています。忍耐しつつ、救いの喜びをもって、日々歩み続けていきましょう。

「大言壮語する者」　ペトロの手紙二　二章一七～二二節　　二〇〇八年一一月二日

序．

「この者たち」（一七節）＝偽預言者（一節）です。二章全体を通して偽預言者たち、つまりキリストに逆らい、裁きを受ける者について語られています。私たちはここから、主による救いにあることに感謝しつつ、私たちは主に逆らい続ける人たちについて真摯に耳を傾けなければなりません。彼らを知らなければ、私たち自身が同化させられ、取り込まれるからです。

Ⅰ．信仰の土台としての御言葉（生命の泉・岩の土台）

さて詩編二三編には、キリストにつながる者の永遠の潤いが豊かに叙述されています。私たちの心を豊かにし、希望と喜びを与える詩編です。主につながり、主の御言葉に聞き

続けることにより、生命の泉が満たされます。また主イエスはサマリアの女に対して語られます。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（ヨハネ四章一四節）。主を信じ、主がお語りになる御言葉によって生かされる者は、希望を持ち続けることができます。御言葉が、体全体を潤します。一方、偽預言者ら主に逆らい続ける者は干上がった泉です（一七節）。生命の泉としての御言葉がないからです。語られる言葉が泉のように人を潤すのは、主が語られる御言葉のみで、御言葉抜き・教会抜きの信仰は死にます。

ペトロは続けて「嵐に吹き払われる霧」（一七節）と語ります。主イエスは山上の説教で家の土台について語ります（マタイ七章二四～二七節）。信仰の土台は、岩としての御言葉です。御言葉を聞かない、御言葉を聞いても行わない者は、雨が降れば倒れます。従って偽預言者の言葉は、霧のように全体を覆い尽くしているようでも、嵐が一吹きすれば、吹き払われてしまいます。すぐに消え去る霧ではなく、嵐や台風・地震が発生しても、ビクともしない御言葉の岩の土台に立つことが、私たちキリスト者は求められています。

Ⅱ．大言壮語

次にペトロは「無意味な（空しい）大言壮語」と語ります。彼らの言葉には御言葉はなく、神にとって空しいものです。しかし人々にとっては魅力的な言葉です。だからこそ、迷いの生活からやっと抜け出てきた人たち、信仰生活を始めたばかりの人たちには、肉の欲・みだらな楽しみの誘惑となります。人々は宝くじやギャンブルに、夢を持ち信じています。魅力があるからです。人を引きつけます。嘘だと思っていても信じてしまいます。そのような弱さを私たちは持っています。信仰者であれども、岩の土台という御言葉にしっかりと根を張っていなければ、彼らの大言壮語に揺り動かされます。

しかし彼らの言葉は空しいです。力ある言葉・真理は、主が語られる御言葉にのみあります。人間の考える事柄は、主の御前には、すべてが空しいものです。彼らは、人には喜び・自由を与えると語りつつも、無に等しく、だますつもりがあろうがなかろうが、人を

騙します。そして彼ら自身は「深い暗闇」（一七節）、滅亡への道・地獄に向かいます。

だからこそ、私たちは真理が示される唯一の道である主の御言葉に聞き続けること、主なる神を信じ続けることが求められています。私たちが服従すべきお方は、天地万物を創造し、私たちの救い主である主なる神の他にいません。主の御言葉に聞き、主の御言葉に服従しなければ、無意味な大言壮語を語る者に従うか、あるいは自らが主となり、大言壮語を語る者となってしまいます。

Ⅲ．御言葉に聞く＝救い主イエス・キリストを知ること、義の道

主の御言葉に聞き従うことは、救い主イエス・キリストを深く知ることです（二〇節）。これが福音です。御言葉に、主イエスこそが真の神の御子であり、救い主であることが語られています。そして御言葉に聞く者は、キリストの十字架の御業により私たち自身の罪の赦しが与えられたこと、キリストの再臨により神の国が完成し、神の民が神の国における祝福に満たされることを知っています。だからこそペトロはさらに言い換えて、「御言葉に聞き従う者は、義の道を知っている」（二一節）と語ります。信仰を貫くことにより、神の国における祝福に導かれます。これがどれほどの祝福であるか、どれだけの喜びであるか。

しかし、神を求めながらも、離れていく人がいます。彼らは、信仰により罪の刑罰の死から免れ、永遠の神の御国の祝福を知りながら、それを捨て、滅びに向かいます。彼らは神の国の祝福以上に、目の前のこと、つまり肉の欲に魅力を感じています。それは裏を返せば、本当の意味での救いによる神の国の祝福がどれほど素晴らしいものであるか理解できず、生きて働く主なる神を受け入れず、理解していません。

主による生命の泉が与えられていることに感謝します（詩編二三編）。

「愛する人たちへの手紙」　ペトロの手紙二　三章一～二節

二〇〇八年一一月一六日

Ⅰ．神の愛によって生かされているキリスト者

ペトロは二章では偽預言者について語ってきましたが、三章に入り一転して、「愛する人たち」と繰り返して語ります（一、七、一四、一七節）。偽預言者は滅びに至る者として記されてきましたが、「愛する人たち」はその逆です。

だれが愛するかと言えば、主語は著者であるペトロです。主によって捕らえられ、信仰を持ち、迫害の中にあっても救いの喜び生きる人たちを、ペトロは「愛する人たち」と語ります。これがキリスト者の隣人愛です。同時に、主なる神によって愛されている人たちです。主の愛は、人を死から生へと移します。罪の裁きとしての滅びから免れ、永遠の生命へと導かれます。キリストの十字架がこれを可能にします。神によって愛されている者は、神によって呼び集められ、信仰の道を歩み続けます。

ペトロは、愛する人たちに二度目の手紙を書いています。私たちは、第一の手紙に続く第二の手紙であるとの認識で手紙を読んでいます。しかし当時は、「ペトロの手紙二」という表題はつけられていませんでした。日本語で読んでいますとなかなか違いを見ることができませんが、第一の手紙と第二の手紙では文体が異なり、別の作者が書いたのではないかとも言われます。そのためペトロが「二度目の手紙」と語る時、別の手紙があったとか、一章と三章は別の手紙であり、一章のことを語っているとも言われます。しかし文体の違いは、第一の手紙はシルワノの手で速記されているのであり（五章一二節）、第二の手紙は、ペトロ自身もしくわ別の速記者によって記されていることにより説明できます。

ペトロは第一の手紙で、苦しみの中にあっても神の国の希望を持って生きるよう励ましの手紙を記しました。第一の手紙は繰り返されて読まれたことでしょう。しかし、人は弱く、信仰は弱まります。ペトロが二度目に手紙を書いているのは、信者は、信仰の闘いの中、信仰的に弱さを覚えるからです。しかし主によって愛されている者が、天国への道を

逸れることなく、神の国に向けての歩みを続けることができるようにとの思いからです。

主は私たちを毎週主の日毎に主の御前に集め、主を礼拝をするよう促します。私たちは、一度、神を信じればそれで良いのではありません。繰り返し主の御前に集められ、主の御言葉によって養われる必要があります。人が弱く、誘惑が押し迫り、救いの喜びを忘れるからです。しかし、神は私たちを愛していて下さっているからこそ、福音に生きることを求めます。このことは、ペトロの言葉によって鮮明になります（一ｂ節）。神の御前に立たされた時、私たちは行い・言葉・心において不純です。しかし主によって生かされた者は、主によって純粋さが与えられます。主の御言葉が語られる度に、自らの罪が指摘され、悔い改めが迫られます。そして神の子として、救いに生きる者であることが御言葉により宣言されます。つまり純粋な心は、御言葉の養いによります。まさに私たちは土の器であり、私たちの内には、なにも良いものはありませんが、主の御言葉により偉大な宝が与えられ、主の御言葉に聞き従う時に、主の純真な心が表れ、人々に対して、主を証しすることができるようにされていくのです（Ⅱコリント四章一～一五節）。

Ⅱ．聖書が語る福音

ペトロが二つの手紙を通して語ってきていることは、旧・新約聖書全体で語っていることでもあります（二節）。預言者は旧約聖書であり、使徒たちが伝えたことは新約聖書のことです。つまり、旧・新約聖書六六巻がペトロの語ることと一致しています。その中心が、主イエス・キリスト、特に十字架です。旧約聖書はそれを前の時代から預言の形で語り、新約聖書は十字架の後に証言という形で語っています。

主によって愛されており、召し集められてキリスト者になった一人ひとりは、このキリストの十字架につながっています。真の神の御子である方が、人として遜られ、人として裁きをお受けになられました。これは神が私という一人の人間を、そして教会に集められているすべての人を、神が愛していて下さっているからです。キリストの十字架は、滅び行く私たちの持っている罪を贖ってくださるためでした。

キリスト者は、このキリストの十字架の贖いにより、自らの罪の償いが成し遂げられ、死から永遠の生命へと招き入れられ、神の子として生き続けることができます。このキリストにつながることにより、私たちは永遠の祝福が約束されています。この約束は、天地万物を創造し、今なおすべてを御支配になられている神だからこそ、揺るぎないものです。

この後、私たちは主の晩餐に招かれますが、ここで示されるパンによりキリストの割かれた体を覚え、ワインによりキリストの流された血を覚えます。それと同時に、神の国の完成時に与えられる主の大晩餐を覚えることができます。私たちキリスト者は、この天国における大晩餐に招かれています。言葉も、国も、肌の色も、また時代も異なるすべてのキリスト者が、この大晩餐に集います。

私たちは、主によって愛され、主によって大晩餐に招かれている祝福に喜びを覚える時、今、信仰の故に苦しみにあったとしても、誘惑に遭っていても、それに耐え、騙されることなく、主の御言葉に聞き続け、主の救いの喜びを持ちつつ、日々歩み続けていくことが、できるのです。

「神の時間」　ペトロの手紙二　三章三～九節　　二〇〇八年一一月二三日

Ⅰ．物事を考える視点

「木を見て、森を見ず」という諺があります。一つの事件や出来事に対しても、そのものだけを見ていても理解できない事柄が、時間的流れ・周辺的な事柄など全体を見渡すことにより理解できます。信仰も同じです。自分の思いで聖書を読み、主なる神を信じると、信仰は主観的になる恐れがあります。神を信じることが平安だから、喜びだからと思います。しかしその感情が薄くなっていきますと、信仰もなくなり、神から離れていきます。その時の主体は、自分の思いであり、神は信仰の対象にしか過ぎません。そして、別の神

がその位置に座することも容易に起こってくるのです。

従って信仰を考える時、視点を高い位置（神の位置）に置き、神は私という人間をどのように思われ、どこに導いて下さろうとしているのかを考えなければなりません。空間的には、大垣教会という一点を見るのではなく、全世界規模に主の救いの御業を見る必要があります。また時間的には、今の時、一週間、一年という時間ではなく、主の天地創造から旧約の歴史、キリストの御業、新約の歴史、終末、神の国の完成をすべて見渡した上で、今を確認しなければなりません。ここに私がいます。

Ⅱ．裁きを待っておられる神

ペトロは欲望の赴くままに生活している人について語ります。彼は目にしたこと、耳にしたこと単純に判断し行動し言葉を発します。彼は、自分に都合が悪ければ不平不満を語ります。彼の発言は常に自分の今の感情です。周囲の人々・物事全体を見渡すことができません。彼は聖書の言葉を部分的にしか知らず、聖書から歴史の検証を行いません。

そのことに対してペトロは反論します（五ｂ～六節）。ペトロは天地創造から語り初め、続けてノアの時代の洪水について言及します。主は、全世界を裁く力を有しておられ、また世界を裁く権能も持っておられます。現代の多くの人々が神の存在を否定していますが、そのことが誤りであることを聖書は語ります。

また、ノアの時代の洪水の後、主なる神はノアと家族に約束をしました（創世記九章九～一一節）「……わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」つまり、主は、世が罪に充ち、主に逆らい続けていても、ノアの洪水のように全世界を滅ぼされることは最後の審判の時まではなく、忍耐しつつ、猶予してくださいます。

その後も人々は罪を繰り返しますが、主は人々が神の約束を理解するように、繰り返し神の民や預言者を与え、人々に悔い改めを迫ります。そのために現在に生きる私たちに、旧・新約聖書の御言葉が与えられています。さらに主は支配しておられる自然を通して、

つまり時には戦争や自然災害という形において、人々に過ちを示され、悔い改めを求められます。

私たちは自分の困難を、神や周囲の人々に不平不満を語る前に、主が忍耐しておられ、私たちが主に立ち帰り、主の御言葉に聞き従う時を待っておられる主の愛を知らなければなりません。義・聖・真実であられる主にとって、人々が主から離れ、罪に生きていることが耐え難いことです。神が救いに予定している最後の民が主の御前に集められる時まで、主は裁きの時を猶予して待っておられます。この主の愛を私たちは忘れてはなりません。

従って、最後の神の民が神の御前に集められ、キリストが再臨される時、最後の審判は始まります。神の民は、主によって神の国に招き入れられますが、自らの思いのままに生きてきたすべての人たちは、主の裁きに遭います。この裁きに例外はありません。

Ⅲ．神の時間に生きること

このように神の救いの御業を高い位置から考えていきますと、神にとって神の子とされている私たちの生命がどれだけ愛おしく、私たちの救いが神の喜びであるかを私たちは知ることができます。私たちは、地上の生涯が非常に長く感じ、また今の苦しみからすぐにでも逃げ出したいと思います。しかし主の歴史は創造から今の時まであり、さらに続きます。そして主はアダムとエバが罪を犯して以来、ノアの時代にすべてを滅ぼされますが、それ以後、裁きを猶予して待っておられます。そしてその間に、主イエス・キリストをこの世におつかわしになり、神がお選びになられたすべての神の子の救いを成し遂げて下さいました。そして今なお、神は、すべての神の子が、神の御前に集められる日をお待ちになっています。このことを覚える時、私たちの人生はどれほどのものでしょうか。わずかな時間に過ぎません。主はそれに勝る神の国における祝福を私たちに約束してくださいます。

このことを理解する時、私たちは、今一時の苦しみを乗り越えることができるのではないでしょうか。主は私たちを救うために、この盛大な主の御業を成し遂げようとしてくだ

さいます。そして主を信じる私たちは、主の祝福の内に、神の国が約束されています。主の救いの御業に感謝と喜びを持って、この一週間も歩み続けていこうではありませんか。

「約束の実現する日」　ペトロの手紙二　三章八～一三節　　二〇〇八年一一月三〇日

序．

私たちが聖書を読む時、また私たちが日々の生活の中にあって判断が求められる時には、その所ばかりに目を向けるのではなく、視野を広げて考えなければなりません。つまり、空間的には、家族や地域ばかりではなく、主が支配しておられる全世界に目を向けること、時間的には、昨日・今日・明日、せいぜい一ヶ月先を考えるのではなく、主の天地創造の時から、人の罪・イスラエルの罪、キリストの御業、新約の時代、現在、終末の時、神の国の完成にまで、目を向ける必要があります。つまり、聖書の歴史と私たちの生活を分離してはなりません。両者は同じ歴史の中にあり、聖書の語る罪は私たちの罪であり、聖書が教えることは、私たちにも語りかけられています。

Ⅰ．時間を支配される神

主なる神は、空間を超え、また時間を超えて存在されています。ですから、ウェストミンスター小教理問答書問四では次のように語ります。

問四　神はどのような方であるか。

答　神は、その存在と知恵、力、聖、義、善、真実において無限、永遠、不変の霊である。

歴史を司られる神の下、私たちは生きています。しかし私たちは、神の御支配の下にあることを忘れ、むしろ環境や周囲の人々との関係性の中で、物事が動いていると考えてしまいます。これは私たち人間の弱さです。

Ⅱ．主の日を定める神

また私たちは、地上の生涯の歩みの中、苦しみ、悲しみの中にある時、主に対する不平不満が出てきます。

時間を支配しておられる主は、私たちをどこに導かれようとしているのでしょうか。主の天地創造には目的があります。それは神の国の完成です。いま地上は、罪に満ち、罪の刑罰としての滅びがありますが、神によって罪赦された神の民は、神の国に導かれ、永遠の祝福に満ちた生命が約束されています。このことこそが被造物である人間の最上の喜びです。神の国の到来への希望を持って、キリスト者は生きています。

私たちは神の憐れみの器として、神の祝福に生かされています（ローマ九章一九～二五節）。ちょうど、私たちがものを作ったり、絵を描いたり、何かを執筆したりする時、私たちは、自由に行うことができ、また自分で気に入らなければ初めからやり直すこともできます。それを繰り返し自分の文章、自分の作品にしていきます。

そして主の日は、主なる神が定めておられます。それは主なる神が、天地万物を創造し、また時間をも支配し、すべての被造物を治めておられるのであり、主なる神が、主の日をも定めておられます。被造物である人間が、その日について、早い・遅いと口出しできる事柄ではありません。ただ、主はすべての神の民が主の御許に集められ、誰一人滅びることがないように、忍耐をもって、その時を待っておられます。苦しみの中、迫害の中、信仰を保っている人々からすれば、「早く」との思いがあります。しかし、主の愛は、まだ主の御前に集められていない人々にも向けられています。主は、彼らの一人が主の御許に戻ってくることが、大いなる喜びです（ルカ一五章）。

Ⅲ．主の日の備えをしておけ！

しかし、私たちにとって主の日は盗人のようにやってきます（一〇節）。つまり、いずれは神を信じると語りつつも、自分の力、自分の思いのままに生き、最後の最後になり救われれば良いと考えていると、手遅れになります。自分の思い、自分の欲を優先させ、主

の救いの御手を拒絶しているからです。本当に主なる神による救いに与り、永遠の生命を求めるならば、ペトロや主イエスの弟子たちが主イエスの呼びかけにすぐに応えたように、またザアカイがすぐに応えたように（ルカ一九章一～一〇節）、私たちも主イエスの呼びかけにすぐに応え、主の言葉に聞き従わなければなりません（一一～一二節）。私たちは、主の御手の中に生命が与えられ、主による救いの御業に入れられています。主の御言葉に聞き従うことこそが、神の被造物である私たちにとっての最も祝福されたことです。

だからこそ私たちの都合で、主を信じる時を定めたり、最後の審判と神の国の到来の時を定めることなどできません。主こそが天地万物の創造者であり、今なお全世界を治めておられ、そして最後の審判を行われるお方です。

ウェストミンスター小教理　問一　人のおもな目的は何であるか。

答　人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

「キリストの恵みと知識」　ペトロの手紙二　三章一四～一八節

二〇〇八年一二月一四日

序．

ペトロの手紙も今日で読み終えます。年の標語、聖句は次の通りでした。

標語　「信仰による喜びに満ちあふれる」

聖句　「あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。」（Ⅰペトロ一章九節）

ペトロは、二つの手紙を通して、迫害の故に信仰の闘いの中にある教会に対して、キリストによる救いにある信仰が喜びに満ちあふれているかを語り続けてきました。

Ⅰ．救いの喜びに生きる

信仰による喜び、それはキリストの十字架による救いに与り、永遠の生命が約束されていることです。それも、天地創造から始まり、神の国の完成に終わる神の御業のすべてを見渡すことにより、神の約束が必ず成就し、成し遂げられる確信が示されていきます。

ところで私たちは、どれほど素晴らしい行いであったとしても、罪・きず・汚れが何一つないことなどありません。私たちが罪がなく、きず・汚れがないと宣言されるとすれば、キリストの十字架につながっていること以外には考えられません。今は待降節です。神の御子がこの世にお生まれ下さったのは、私たちの救いのためにキリストが十字架にお架かり下さったことと直結しています。それ抜きのクリスマスは空しいです。

主は、私たちを「きずや汚れが何一つない」者にして下さいますが、一方、主は偽教師たちを「彼らは汚れやきずのようなもの」と語ります（二章一三節）。主は、主に逆らい、主の民を苦しめる者を裁き、一方、主に従い行く神の民に対しては、本来、罪があるにも関わらず、キリストの御業により、救いをお与え下さいます。神の恵みに感謝しましょう。

そして主は、私たちに「きずや汚れがない」ように過ごすことを求めます。それは、善き業です。キリスト者の善き業は、たとえそれが不十分な行いであったとしても、主はそれを良しとして下さいます。できないから行わないのではなく、できることを行うのです。

だからこそ、神の救いに生きる者は、救いの感謝と喜びを持って、主の御言葉に聞き従う者とされていきます。律法とは、自らの罪が示され、キリストによる救いを求めるしか生きる道がないことを知ることと同時に、キリストに倣う道を示して下さいます。

そしてペトロは更に、「わたしたちの主の忍耐深さを、救いと考えなさい」と語ります。ペトロは九節の言葉を繰り返します。主が裁きの時を猶予し、待っていて下さったからこそ、私たちは主と出会い、主による救いの道を歩むことができます。

Ⅱ．神の知恵と私たちの理解力

一方一五節後半で、ペトロはパウロに言及します。唐突です。それは主が何もしないで待っておられるのではないことを語っています。聖書は、旧約聖書に始まり、各福音書、

使徒言行録、パウロ書簡、ヘブライ書、ペトロ書等の公同書簡、黙示録があります。旧新約聖書全体を通して、主は御自身を私たちに証しておられ、私たちが救い主である神を知り、主の救いに入れられることを待ち望んでおられます。

しかし、人々はペトロとパウロが語っていることが異なると言います。ペトロはそれを否定します。パウロも同じです（Ⅰコリント一章二～一八節）。ペトロとパウロが語っていることは、救い主イエス・キリストによる救いであり、一致しています。

しかし、パウロ書簡、特にローマ書、そして旧約聖書などは難しいと言われる方もいるでしょう。しかし聖書は、イエス・キリストの十字架につながる人は、神による救いに与り、キリストの十字架の故に罪が償われ、キリストの復活による命を得ていることを、私たちに示します。それが旧約の時代から語られ、新約の時代においても語られています。救いという一つの頂点を目指して、聖書全体が語っています。一つの所が理解できなくても、他の箇所を読み進むことにより、神の救いの御業の全体像を見ることができ、救いに導かれます（参照・詩編一一九編三〇節）。むしろ難しく理解できない所で立ち止まり、自らの理屈で解釈しようとすれば、誤った解釈を行い、救いの御業が見えなくなってしまいます（参照・ウェストミンスター信仰告白一章七節）。

Ⅲ．私たちの生きる目的

私たちは、主がお与え下さった聖書により、主イエス・キリストによる救いの御業が示されています。ペトロは主なる神による救いの御業全体を見通すことにより、主なる神による救いの御業を示し、主の救いの確かさをお示し下さいました。だからこそ、私たちは、不道徳な者たちに唆されて、堅固な足場を失わないように注意すべきです（三章一七節）。

ウェストミンスター小教理問答　問一　人のおもな目的は、何ですか。

答　人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。